

陳舜臣さんを語る会通信

NO.6

May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月1日

陳さんの強い思い入れ『耶律楚材』(1994年)

本号で取り上げた『耶律楚材』は、陳舜臣さんの強い思い入れを感じる作品です。いろんな角度から見ていきます。まずは、人物、時代背景、登場人物、ストーリーです。(編集委員 橘 雄三)

《1. 人物》

陳舜臣さんは、飯田利行著『大モンゴル禅人宰相 耶律楚材』跋文で次のように書いています。



「耶律楚材はふしぎな魅力をもつ人で、彼の息吹きはいまもこの世界にこだましているような気がする。契丹王朝の末裔でありながら、女真王朝の金に重臣として仕えた家に生まれ、自

分はチンギス・ハンに降ってモンゴルの宰相となり、グローバルな活動をした」「耶律楚材は、来るべきボーダーレス時代の先駆者といってよい」「人類の生き方を示すみちしるべ」

《2. 時代背景、登場人物、ストーリー》

唐が滅びたあと、半世紀ほどの混乱の時代を経て、宋が中原を統一したが、北方、契丹族の遼、続いて、女真族の金の力は強く、耶律楚材が生まれた12世紀末は、淮河以北は金の版図となり、宋は臨安(杭州)に遷都、南宋の時代となっていた。(右上の地図)

楚材は、2歳にして父を失う。「母楊氏、之に学を教える」。楚材は学問好きの青年に成長し、儒学、仏教の教え、詩、天文ほかを修める。科挙を受験し、首席で進士に及第、将来の閣僚候補と目される。

19歳で梁氏を娶る。また、偶然出会った地方長官の娘、貞婉に心を奪われ、納れる。

北方の草原では、チンギス・ハンによる諸部族の統一が進み、父が予想した新しい勢力が勃興する。そして、「草原に生まれた巨大な力が金国をのみこんだとき、その力に用いられる人物になれ」、という父の願いに答えるときが来る。

1215年、モンゴル軍は燕京(北京)を陥す。やがて、チンギス・ハンに召され(招くように工作し)、カラコルムに赴き、チンギス・ハンに仕える。

民族や文化の違いを乗り越えて、人々は相互に理

解し、共存してゆかねばならぬという「作者の願望の体現者」として耶律楚材は描かれる。



登場人物	
耶律楚材	1190～1244。遼の王族出身。初め金に仕えたが、のち、モンゴルに仕える
梁氏	楚材の妻
貞婉(蘇氏)	蘇東坡の血をひく。楚材の妻
耶律履	遼の皇室出身。契丹人。金王朝の重臣(宰相)。楚材の父
楊氏	楚材の母
耶律弁才	楚材の異母長兄
耶律善才	楚材の異母次兄
万松老師	楚材の師である禅師
法仁	報国寺の名僧
鉄壁	報国寺の雑用をする少年。法仁の命で薬草採取に遠方まで出かける。情報通
長春真人	全真教の教主
元好問	楚材と同年の詩人
チンギス・ハン	モンゴルの大首長
長男ジュチ、次男チャガタイ、三男オゴディ、四男トゥルイ	
耶律阿海	モンゴルの幹部

『耶律楚材』に対する評・解説、及び陳さんご自身の言葉

《3. 陳舜臣『耶律楚材』に対する評・解説》

(1) 『耶律楚材』(1997年 集英社文庫)

稲畑耕一郎 (1948-) による「解説」

十三世紀に生きた耶律楚材が、果して本当にそのような人間であったのかどうかは、ここでは問題ではない。作者陳舜臣は、耶律楚材の真正なる「伝記」や「評伝」を書こうとしたのではない。ある明確な意図をもって、これを「小説」化したのである。作品中の耶律楚材や他の登場人物には、作者の仮託した思いも多いはずである。

(2) 杉山正明 (1952-) 『耶律楚材とその時代』(1996年 白帝社) 「あとがき」

陳舜臣氏の『耶律楚材』は、楚材をあらんかぎり巨大化、聖人化した歴史ファンタジーであった。小説は、ここまで現実から離れて、虚空のなかに飛翔できるのか。(中略) ようするに、せいぜいが「華北サイズ」の人にすぎない耶律楚材を、「ユーラシア・サイズ」の「超人」に仕立て上げたいばかりに、無理を重ねざるをえず、「超歴史」の解釈を繰り返さざるをえなくなったのだろう。

《4. 陳舜臣さん ご自身の言葉》

(1) 「歴史小説の書き方」

本来、歴史小説のオーソドックスな書き方というのは、作家の頭の中にこの人物はこういう人だという像がまずあり、その人を中心にして当時の状況を眺め、資料を調べ、世界を作っていくものだと思います。もちろん、私の頭の中にも、自分なりの、歴史上に実在した人物としての諸葛孔明像というものはあるんですが、今回はあえてそれを無視して全然違う諸葛孔明にしてみました。(『本の話』2004年12月号)

上の文章は陳舜臣さんが『諸葛孔明』を書いたときのことばですが、『耶律楚材』については、あてはまる部分とそうでない部分があるように思えます。

(2) 「理想視すぎる視線」

歴史小説というものをしていると、「あなたが最も書きたいと思っている人は誰ですか？」という最も答えにくい質問を受けることがある。

40年あまりも書いていると、魅力のある人物はほとんど私の小説のなかに登場している。耶律楚材、諸葛孔明、林則徐、鄭成功、空海、チンギス・ハーンなどから一人をえらべ、ということからして難題である。(中略)

私たちのなかに、これらの人びとは一種の幻想と

して生きているのかもしれない。私たちの未来のなかで、これら過去の幻想がいかにうごくかと、ふと空想してみることもある。人はそれぞれの空想をもっているのだ。(中略)

私は耶律楚材を書いているとき、ふとここなら中島敦はどんなふうに書くだろうか、と思ってしまうことがあった。言わばもう一人の記述者の眼を意識するのである。あとで考えてみると、それも結局自分の別の目であったのだ。第二の眼どころか、第三の眼を意識することさえある。そのときは、私は自分に言いきかせる。— ちょっと待て、それはつぎの小説だ。いま出てくるのはまだ早い。第三の眼とは、理想視すぎる視線である。

(2003年 集英社『Who is 陳舜臣』「巻頭随想」)

(3) 「六十代、最もみのりの多い時代であった」

顧みていえば、私は六十代が最もみのりの多い時代であったように思う。書きたいものを、ふさわしい雑誌や新聞に連載できるようになった。(中略)

私はいよいよ耶律楚材を書こうと思った。ちょうど読売新聞がチンギス・ハーンの墓をさがす、「ゴルバン・ゴル」計画を企画し、その三年目にあたっていた。同行作家は一年目は開高健、二年目は司馬遼太郎で、三年目は私であった。(中略)

私たちはモンゴルの草原に坐って、いろんなことを語り合った。草原を疾駆するモンゴル軍団のこと、その行きすぎを諫める耶律楚材の苦衷……。こんなさまざまな会話から小説『耶律楚材』が生まれたのである。

帰りに北京頤和園にある、耶律楚材の墓で小説執筆の覚悟を述べたのも、いまは思い出である。(『Who is 陳舜臣』「あとがき」より。右写真も同著)



↑ 耶律楚材祠大門前
1993年5月撮影

小さい画像は耶律楚材祠内庭にある墓室

乾隆帝が頤和園の元となる清漪園(せいいえん)を造らせているときに耶律楚材の墓が見つかり、祠を建て、丁重に祀ったと言われている

辛辣を極める楚材評価 杉山正明著『耶律楚材とその時代』

《5. 杉山正明著『耶律楚材とその時代』抜粋》

杉山正明著『耶律楚材とその時代』（1996 白帝社）は、“素顔の耶律楚材”というより、“耶律楚材の虚像を暴く”といった手厳しいものです。

まず、耶律楚材の地位ですが、チンギス時代（西征時）は「占い師」の一人、オゴディ時代（華北時代）は「記録がかり」「文書がかり」と断じ、その人間性については、「そこまで言うか」というほどに辛辣です。抜粋します。

①楚材は、自分を美しく語ることが、たいへん好きな人柄だったらしい。…本来、心の率直な表白であるはずの詩においても、ポーズの多い人であった。

（p. 27）

②狷介で、権柄づくの威張りだけれども、人によくされると、たちまちのぼせあがる、どちらかという単純な性格であつたらしい。（p. 50）

③『湛然居士文集』/自分をほめたたえる口調も、読んでいるほうが恥しくなるようなウソと臆面のなさで、閉口してしまう。…さらに、莫迦莫迦しいのは、自分の現在の地位について、「自ら愧ず、才術無くして、忝くも位は人臣を極む」ということである。本当は、モンゴル書記局の次官でいかにすぎないのに。…啞然とするよりほかはない。（p. 137）

④科举トップ合格/ようするに、わがままで、世間しらずの名門のおぼっちゃんが、家柄と亡父の名声を盾にとって、なかば、皇帝をおどして、別枠受験した。すこし、皮肉めいていえば、トップ合格保証つ

きの“お受験”であった。…このあざとい虚構と強引さは、当時の関係者は、みんな知っていたことだろう。…溜め息がでるようなずるさである。…耶律楚材という男は、「社会人」となる出発点から、ぜんぜん、素直でない。どろどろとした名誉欲、名声欲の塊のように見える。…人としての慎しみとか、謙虚さ、常識とかいったものとは、ほど遠かった。アクのつよい、傲岸で、ひとりよがりの自慢屋の影が、もう、このころから、濃密に、かれとその身边から、漂っている。（p. 161-165）

⑤母、妻、子に対する楚材の仕打ち/しかし、なによりも、真実、あわれをきわめるのは、梁氏と鉉の母子である。…楚材は、どうして、この母子に、ここまで酷薄でいられたのか。夫として、父親として、いや、それ以上に、人間として、恥ずかしくはないのか。…楚材は、母を捨て、妻を捨て、子を捨てて、モンゴル側の人間となった。…いずれにしても、人として、もはや楚材は、どうしようもないところまで、いつてしまっているといわざるをえなくなる。もとより、人間の風景として、すがすがしさとは、もっとも遠いところにある。（p. 224-226）

確かに、楚材に対して、辛辣を極める内容ですが、著者杉山正明氏は1952年のお生まれですから、執筆は、40代前半です。新進気鋭の研究者と言えます。研究成果に基づき論理的に記述されていますので、納得です。ただ、真実と「小説化」の距離があまりにも大きく、読後感の処理に困ります。

落ち穂拾い

【当時のままの門扉】

『通信』3号4面で、「陳舜臣さんの引っ越し歴」を取り上げました。その際、通し番号9、北野町1-31の鉄の門扉の写真を添え、「当時のまま」とコメントしましたが、その根拠となる写真です。

『神戸ものがたり』「わが心の自叙伝」より
真ん中は長女・由果さん（二九六〇年ごろ）



家族写真背景の鉄扉と、今に残る鉄扉のデザインを比べて下さい。写真双方、白矢印の部分に注視！

陳舜臣さん、1979年3月 太平天国取材旅行－桂平、金田村へ－

『通信』第4号で陳舜臣著『太平天国』を取り上げ、第3面で、『六甲山房記』「桂平まで」を引用、陳舜臣さんの南寧～桂平途上で生じた「面倒なこと」にふれました。

ここにあげた、1979年5月25日付『関西華僑報』掲載記事は、陳さんの、取材旅行直後の寄稿です。「桂平まで」の続きとしてお読み下さい。文中、「西山」、「西山茶」、「洗石庵」、「潯江(じんこう)のフェリー」、「太平天国起義の地」などが出てきます。文章を補足する意味で、陳さんの旅行の13年後になりますが、私の桂平・金田訪問の際に撮った写真を添えましたのでご覧下さい。(編集委員 橘雄三)



中国の伝統的、土俗的なオモチャを
絵画化したもの(田原作)

太平天国についての取材のため、今年の三月に広西壮族自治区のかなり奥地までいった。太平天国起義の地は桂平の金田村で、そこへ行くには南寧市から車で五時間以上もかかる。桂平県城から金田村までは、フェリーで潯江を越えねばならないが、道路は舗装され、三十分で行ける。桂平県城でひと休みしたとき、私たちはすぐそばの西山に遊んだ。西山は緑濃い保養地で、隋代から風光明媚の地として知られていたそうだが、唐末創建の尼寺の洗石庵があり、そこに二人の尼僧がいた。その一人の釈寛能(これは法名で、本名は竜六偉)は、広東省南雄県の人で、ことし八十四という高齢だがとてもお元気であった。北京大学を卒業して長年、教職についたこともあり、なかなかのインテリばあさんである。寛能尼がおっしゃるには、解放後、洗石庵は寺の土地を利用して茶の栽培をはじめたそうである。最初の年の茶葉の収穫は僅か三十斤にすぎなかったが、毎年茶

煙は拡大され、一九五七年には輸出可能までこぎつけたという。いまは東にむかった土地数十畝の茶畑から、七万斤の茶葉がとれる。

「桂平県志によれば、この地方の茶は日本から移植したということだと、寛能尼は言われた。私には意外であった。茶葉は中国にきた日本人留学僧が、帰国の際に持ち帰ったというのが定説である。

かカン違いをして、誤った記述をしたのであらうと思った。

だが、県志の編集というのは、私の記事ではそれなく、その記述にはそれぞれ根拠があるはずなのだ。たしかに茶葉は、日本が中国から移植したものである。しかし、日本で日本独自の「日本茶」に育ったのだから、数百年たったあと、留学僧がそれを中国へ土産に持って行くことも、ありえないことではない。明代に日本僧が雲南の奥地まで行ったことは、文献上も確認されている。広西桂平県のいわゆる西山茶が、里帰りした日本茶の流れをくんだものだという可能性はあるだろう。

異なる土壌に移せば、すこし異なった種類のものになる。それをまた異なる土壌に移すと、第二次の変質がおこる。だが、根源は同じものなのだ。

桂平の西山茶のようなケースが、中国と日本の文化交流のうえで、しばしばおこっているのではあるまいか。私は西山茶を寛能尼からいただいたて持って帰ったが、なに気なく飲んでいても、日本茶らしい味はしない。だが、よくよく味わっていると、「おや、すこし似ている」という気がする。中日文化について、ふだんは気づかないが、よくよく考えてみれば、「これはひょっとすると」と共通の源流に思いたることがある。その様な感覚を大切にしたいと思う。

特別寄稿

桂平西山茶

陳 舜 臣 (作家)



写真：上段左から、西山登り口、西山茶の茶畑、門の上部「庵石洗」の文字、下段左は、潯江の渡し、下段右は金田村の「金田起義地址」(写真はいずれも、1992年 編集委員撮影)